

アンドレ・ブルトンの『ナジャ』における主観性の問題

加藤 彰彦

[要旨]

アンドレ・ブルトンの『シュルレアリスム宣言』においてはいささか観念的な楽園志向が見られたにも拘らず、『シュルレアリスム第二宣言』においては一転して暴力的な現実認識が前提としてある。このような中において、ブルトンはどのような対応を考えたのかを、同時期に書かれた『ナジャ』について探っていくのが論考の出発点である。そのためまず、サルトルの存在論やフーコーの権力論を通して、現実における暴力が単に実力行使的なものに留まらず、我々の意識の中に入り込んでしまうものであることを確認した。そしてその上で、主体性を確立していくことが対処方法として考えられるのであるが、『ナジャ』においてはブルトン自身の主体性を確立するために、ナジャの身体性を解体して、最終的には不在の存在としてしまう、つまりドゥルーズ=ガタリの言う「器官なき身体」となってしまうという構図で読解することが可能であると考えた。ところがテキスト中において頻出する「目」や「手」のイメージから、逆にジジェクの言う「身体なき器官」としてのカメラの目が機能していることが読み取れた。特定の人物に帰することのできないこのようなカメラの目を成立させているのは作者としてのブルトンの主観性であり、それはブルーストにも見られるように、記憶の中にある単なる事実として語られるもの以上の何かである。このような主観性を持ったブルトンが向かうところは理想の女性の追求であり、ナジャはその一つの表われであると考えられるが、理想の女性を追求することによって自らの独自性を明らかにしようとすると考えられる。

[キーワード]

暴力、器官なき身体、身体なき器官、記憶、主観性

序章

1924年に刊行されたアンドレ・ブルトンの『シュルレアリスム宣言』において、シュルレアリスムは「現実の世界の訴訟」(PI p.346)を求めるわけであるが、それにも拘らず現実にはブルトンにとっていささか退屈な場所ではあるかもしれないのであるが、安住の地であるように思われる。それは巻末に添えられた自動記述のテキストである『溶ける魚』が、フェルディナン・アルキエが『シュルレアリスムの哲学』において指摘しているように(PS p.20)、一種の楽園を描いているからである。もう少し正確に説明するならば、アルキエは『溶ける魚』について次のように書いているのだ。「そんなわけで『溶ける魚』の雰囲気は光に満ちているのである。(中略)全ては『溶ける魚』において、幸福への渴望が精神の全ての運動を色付けているわけだし、特にその裏返しにすぎない否定と反抗の態度より優位を占めていることを示している。」(PS p.14)そして更に「しかしながらブルトンが幸福を見出したいと思ひ、それも愛によって見出

したいと思うのはこの世界からであり、この世界のみにおいてである。(中略) 再び見出された楽園は日常生活の、美しいものに変えられた日常生活のそれではなければならない。それは『溶ける魚』においてはパリの、愛の部屋の中でも最も素晴らしく最も光り輝く部屋へと絶えず変形させられるパリのような都市のそれなのである。」(PS pp.19-20)

つまり『シュルレアリスム宣言』を書いたブルトンにとって、ほぼ同時期に書かれた『溶ける魚』がまさに楽観的とも表現し得る信頼や希望に満ちていたことは明らかである。『シュルレアリスム宣言』においてブルトンによって否定されている現実とは、夢と希望を見失い日々繰り返されるにすぎない生活を指しており、現実そのものではないのだ。だからこそブルトンは恋愛や想像力によってその日常生活を変えていこうとするわけである。このように解するならば、アルキエが『溶ける魚』更には『シュルレアリスム宣言』について次のように言及しているのも理解されるだろう。「活動の様々な面は見分けられるものではないし、テキストは人間全体に向けられている感動や希望を生み出すことを目的としている。そしてブルトンの感動と希望は、当初から、美を前にしての感動であったしその中での希望であったことを私は充分に知っている。つまり『宣言』はただ美のみにおいて時としてイメージの価値規準を探し求めているようにさえ思われる。」(PS p.12)

シュルレアリスムのイメージについては後に書かれた『通底器』においても同じ趣旨の考えが展開されていることから、一定の到達を可能にしていたと言えるだろうが、シュルレアリスム全体として捉えるなら、この『シュルレアリスム宣言』とはまさに「出発点」(PS p.12)であったということになるだろう。我々がそのように判断せざるを得ないのは、ブルトンにとって捉えられていた現実がまさにブルトン自身によって修正されなければならないからである。一例を挙げるなら、ブルトンは『シュルレアリスム宣言』において超現実を具現化したものかとも思わせるが、一つの城を思い描いていることを明らかにしている。確かにそれは未だ実現されたものではないだろうが、単なるイメージにすぎないというのではなく、その気になれば実現することが可能と思われる類のものである。そこにおいては「私の友達の何人かがそこに永久に身を落ち着ける。」(PI p.321)「我々がそこにいる時」(下線原文)、我々は本当に気ままに暮らすのだ。」(PI p.322)

この時期はまさにシュルレアリスム運動の初期ということもあるだろうが、青春期の仲間同士の信頼に満ちている。ところが1930年に刊行された『シュルレアリスム第二宣言』において、その様相は一変する。確かにこの時期はシュルレアリスム運動内部の揉め事もあり、脱退する者も出てきたりする状況であったため、ブルトンは論争的であり攻撃的である。『第一宣言』が楽園を想起させるとするなら、『第二宣言』はまさに現実を想起させるものである。特にブルトンはシュルレアリスムという言葉を使いながら、次のように表現するのだ。「シュルレアリスムは絶対的反抗の、全面的不服従の、正規のサボタージュの教義を作ってはばからなかったし、今尚暴力以外の何ものにも期待しないことが理解される。最も単純なシュルレアリスムの行為は、ピストルを手にして、デモに行って、群衆の中でできるだけいい加減に撃つことにある。」(PI pp.782-783)そしてこのような表現について注を付けて、次のように説明するのだ。「私はこれらの最後の二つの文が、ずっと前から私を内部分裂させようとしている何人かのへまな奴

らを喜びでいっぱいにするだろうということは知っている。(中略) この連中のつまらない当て込みをはずすことより簡単なことは私にはない。そうなのだ、ある人物の中にあつて、暴力が折り合う (下線原文) のか折り合わない (下線原文) のか自問する前に、私はその人物が本質的に暴力的かどうか気がかりなのである。(中略) 私が最も単純と言っているこの行為についてだが、私の意図は中でも特にそれを勧めることではないというのははっきりしている。」(PI p.783)

そして我々はブルトンのテキストにおいて、ここに至って「暴力」という言葉が出てきたことに注目するのである。現実を肯定するにせよ否定するにせよ、この現実において幸福を追求するブルトンにとって、現実には暴力があるということ、それに対してどう立ち向かっていくかという問題は、意識するしないに拘らず、出てくるのである。この問題についてシュルレアリスム運動という立場から検討を加えるなら、ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリが『ミル・プラトー』において指摘しているように、「人々の群れや仲間は権力機関に精神を集中する樹木型と対照的に、リゾーム型の集団である。」(MP p.443) わけだし、「仲間のそれぞれの構成員は他の構成員の一人、二人ないしは三人とつるんでいて、その結果、親分格と仲たがいがいた場合には、一人で行くことはなくて、その味方を連れて行くのだ。」(MP p.442) ということであるなら、それなりに理解することはできるだろう。

しかし問題はシュルレアリスム運動の経緯を理解することではなく、ブルトン自身この暴力の問題に触れた後で、「私はただここにおいて人間的絶望を復帰させたかっただけであり、そのこちら側では何もこの信念を正当化することはできないだろう。」(PI p.783) と書いているように、シュルレアリスムの理解にとっても根源的とも言える問題なのである。『シュルレアリスム第二宣言』の刊行は1930年であるが、内容それ自体としては最初1929年12月号の『シュルレアリスム革命』誌に発表されている。そしてこの前年に初版が刊行されたのが『ナジャ』であつて、シュルレアリスムにとっては重要な時期であつたと言える。それは同時期に『シュルレアリスムと絵画』が雑誌掲載されていたにとどまらず、政治的には共産主義との対決を迫られたこともあり、1926年9月には『正当防衛』を発表して、革命への同意を示しながらもシュルレアリスムの独立を主張している。つまり『ナジャ』はただ単にシュルレアリスムの一作品として捉えられるだけでなく、この時期にあつてブルトンがいかなる考え方を持っていたのかを明らかにし得る重要なテキストであるはずである。先程の問題について言うなら、暴力について明確にそれを表示していなくても、根本的にはどのような態度で臨むべきであるかについて窺い知ることができるのではないかと考えられるわけである。我々がこの論考において出発点として捉えたのはまさにそのような観点からである。

第一部 他者の暴力から自らの主体性を確立するために

第一章 サルトルの存在論の問題点について

暴力の問題を考える場合自己と他者という対立の図式で考えるわけであり、この問題についてはサルトルの『存在と無』を参照することができるだろう。ここにおいて注意しておかなければならないのは、一見何ら暴力的ではないかのように思われるところに存在する暴力についてなのである。サルトルは『存在と無』において対他存在について論じながら、「私」という主

体性がいかにして破壊されるかについて事細かに説明している。まず「私」は他者の視線を前にしてその対象と化するのである。つまり「まず他者の視線（下線原文）は、私の客観性の必要条件として、私にとって全ての客観性の破壊である。他者の視線は世界を通して私に到達しそしてただ単に私自身の変形だけではなく、世界の全面的な変身である。」(EN p.328)

もちろんここにおいて「私」とは対象としての「私」であって、常に「私」が対象であるわけではない。他者の側から見ての「私」も当然のことながら存在するわけである。ところがサルトルの説明は、更に次のように続くのである。「我々は今視線の性質を把握することができる。つまり全ての視線において、私の知覚範囲で具体的で本当らしい存在として対象である他者の出現があるし、この他者に対するいくつかの態度の際に、私は羞恥や不安等によって私の<見られる存在>を把握することに私自身決心する。」(EN p.340)

この「決心」という言葉があるために「私」は主体性を確保しているように思われるが、その「私」は羞恥や不安にとらわれているのであるから、既に「私」は他者の支配下にあると言っていいだろう。もちろんここにおいても「私」とはたまたま羞恥や不安を感じるような状況の下での「私」であって、常に「私」がそのような状況にいるわけではない。むしろこのように他者の支配下にある「私」は本来の「私」つまり主体性を持った「私」ではないのであるから、「私」は何としても主体性を取り戻さなければならない。ここにおいて「私」は自らの主体性を取り戻すことを試みるわけである。サルトルは次のように論を進める。「他人に対する私の関係の二番目の機会として、我々が他者の客観化を理解することができるのは、私に対する主体である他者のこの存在からであり、受け入れた私の対象性においてそしてそれによってである。実際のところ顕示されていない私の限界を越えた他者の存在は、自由を自己性として私自身を私が再び捉えることの動機として役立つことができる。」(EN p.347)

サルトルによれば、「私」が「私」の主体性を取り戻すということは、既に「私」の主体性は存在していたかのように思われるが、他者のいない世界での「私」を考えることは恐らく出来ないであろうということを考えるなら、取り戻すではなく新たに確立すると言うべきであるかもしれないのであるが、ここにおいて「私」の主体性は予め他者によって奪われているという意識が存在しているのだろう。仮に取り戻すということが正しいとして、何故他者は「私」の主体性を奪うことになるのであろうか。この点についてサルトルは「私」と他者が相互に入れ替わることが可能だということを前提にして、次のように説明する。「私にとって価値がある全てのものは他者にとっても価値がある。私が他者の支配から私を解放しようとしている間、他者は私のから自らを解放しようとしている。私が他者を隷属しようとしている間、他者は私を隷属しようとしている。ここにおいては即自的对象との一方的な関係が問題になっているのでは全くなく、相互的で流動的な関係が問題なのである。従ってこの後に続く記述は衝突（下線原文）の見通しにおいて考察されなければならない。衝突とは対他存在の本来の意味である。」(EN p.431)

ここにおいて奇妙であるのは、「私」と他者とは相互的な関係であるにも拘らず、「私」はまず他者によって対象とされた「私」から主体性を取り戻そうとする一方的に負荷のかけられた関係なのである。もちろんここにおいて示されている「私」とは対象化された「私」の立場を

明らかにしているのであるが、仮にサルトルの言うように「私」と他者が相互に入れ替え可能な関係であろうとするなら、つまり他者が「私」によって対象とされ主体性を失った存在であるとすると、その時点において「私」は他者から取り戻すまでもなく主体的な存在になっているのである。そして以上の議論を踏まえた上で、我々はようやくブルトンの『ナジャ』のテキストを対象とすることができる。『ナジャ』のテキストは本体であるナジャの物語を中心に、それを本編として捉えるなら前編においてブルトンにとってシュルレアリスム的と形容することも可能であるかもしれないような挿話やブルトン自身の思考が示され、ナジャの物語以後の後編においては、ナジャの物語の見直しとともにブルトンの思索が展開されることになる。またそのナジャの物語の前半部分は10月4日から12日まで（正確には日付は記されていないが13日までと考えられる）の日記形式での記述によって構成されている。そのまさに初日である10月4日においてブルトンはナジャと街中で出会うことになるのであるが、その辺りの記述は以下のものである。「去年の10月4日、全く暇で非常にどんよりしたその頃のある午後終わりに、私はそんな時を過ごす秘訣を持っているので、私はラファイエット通りにたまたまいたのだ。（中略）私はその名前を忘れたか覚えていないかだが、そこ、ある教会の前のこの十字路を渡ったばかりだった。突然、反対の方向からやって来ていて、恐らく依然として私から十歩くらいのところにいる時、私は非常に貧しい服装をした若い女性を見る、彼女もまた、私を見るか見た。（中略）ためらうことなく、私は見知らぬ女性に話しかける、最悪を予想しながら、私は別の方に賭ける。彼女は微笑む、しかし非常に神秘的で、何と言うかその時私は何も信じることはできないけれども、理由は認識している（下線原文）といったようなものなのだ。」（PI p.683, p.685）

ここにおいてサルトルの理論は有効性を失うだろう。サルトルの考えによれば、あたかも視線を交わすことによってどちらが支配的であるかを決するという事態に至るわけであるが、このブルトンの記述からはそのような支配権を取ろうとするような意識は見られない。そもそもそういうことはどうでもいいというか、最初から問題になっていないと言うべきだろう。敢えて言えば、ブルトンも、そして相手の女性、彼女こそナジャであるわけだが、ともに主体的存在であったと言うことさえ可能である。従って主体性の問題はこの視線の意味するところとは別のところにあると考えざるを得ないのである。つまりサルトルの言うように、他者の視線を通してそこから読み取れる自己の姿を対他存在として捉えるという図式は正しいものであり、理解することは可能であるが、自らの自由を奪い、「私」に対して支配的である他者の視線から読み取れる自己の姿が問題なのではなく、そしてまた自己の姿を形作っている他者の存在が問題というのでもなく、その向こうにあるあるいはその奥にある暴力的なものが問題なのであると言えるのではないだろうか。ここにおいて再びサルトルの存在論に立ち戻って考えてみるならば、そこにおいて問題とされている状況は生死を問うという類のものではない。それにも拘らず、例えばサルトル自身の表現を借りるなら、「私がそうであるこれらの二つの試みは対立している。それらのそれぞれはもう一方の死、つまり一方の失敗がもう一方の採用に動機を与えるということである。このように他者に対する私の関係の弁証法が存在するのではなく、循環する輪が存在するのである。」（EN p.430）

つまり簡単に言えば、そこにあるものは二者択一的な事態でしかないわけである。あるいはそこまで行かなくても、「この記述は、これまでのところ、主人と奴隷の関係の有名なヘーゲルの記述と、十分一致しているだろう。」(EN pp.437-438)という表現に接するならば、確かにサルトルの存在論において、自己と他者との関係を分析し、自己の主体性を確立、それは他者の支配下にある自己の存在の自由を他者から取り戻すことに他ならないわけであるが、そのような試みがそれ程容易ではないことも事実であって、それは自己なり他者なりをそれなりの一個の人格を持った存在として捉える時にそこから抜け出てしまう何ものかであって、理論的にそれを把握していなければもちろんのことそれを理論の枠内に入れる形で把握していても如何ともし難い厄介なものが存在するからである。ドゥルーズ=ガタリは『アンチ・オイディプス』において「欲望する機械」を捉え、次のように表現している。「欲望する機械を明確に定義するのは、四方八方にあらゆる方向に果てしなく結合する力である。それらがいくつかの構造を横断すると同時に支配する機械であるのは、まさにそのことによってなのである。」(AO p.469)

つまり対象として容易に指し示すことができる程単純な存在ではないわけであり、また欲望ということであるならそれ程否定すべきものでもないと考えられもするが、ここで問題としているのは単なる欲望ではなく欲動として捉えられるものであって、より根源的なものなのである。従ってサルトルがその存在論において、他者の自己に対する態度を考え得る限り列挙し、それに対する自己の側からの態度を検討したところで、何の解決にもならないことは明らかである。そしてその根源的とも言うべき欲動が死をもたらす形で作用する場合、それを暴力として捉えるわけである。ここにおいて暴力が主として身体に向けられた力であることを考えるならば、もう一方において大きな力を対置させることが必要なのではないかという考えに至るわけである。その力とはまさに権力であって、第二章においてはその権力がいかに存在しいかに作用するかについて見ていくことになるだろう。

第二章 フーコーの権力論を元に考える

既にある暴力をなくしてしまうことはできないと考え、それでもそれがもたらす害について最小限に留めておきたいということから権力に期待する。これは社会秩序を守る一つの方策であり、政治学の基礎知識として権力の根拠となるものが物理的暴力にあるということを指摘するだけで充分だろう。日頃そのような物理的暴力を意識することがないのは、時の政権や政治体制に一定の信頼感を寄せているためであり、いざとなれば物理的暴力が顔を覗かせることは明らかである。この権力について我々が求める分析を加えたのがミシェル・フーコーであり、『監視することと処罰すること』において権力の最もわかりやすい形として提示されたものが、「一望監視施設」である。議論を始める前に、フーコーの説明を理解しておこう。「ベンサムのパノプティコン」(下線原文)はこの構成を持つ建築上の象徴である。その原理は知られている。つまり周辺には環になった建物がある。中央には塔である。それは環の内側の正面に対して開かれている大きな窓があげられている。周辺の建物は独居房に分かれていて、そのそれぞれは建物の厚みを横断している。それらには二つの窓があって、一つは塔の窓に対応して内側にある、もう一方は外側に面していて、光が独居房を貫通して横断することを可能にする。それ故中央の塔に見張りを一人置き、そしてそれぞれの独居房に狂人、病人、受刑者、労働者あるい

は生徒を閉じ込めるだけで十分である。」(SP pp.201-202)

この一望監視施設の利点は、根本的に暴力が存在していながら、表面的にはあたかも暴力的ではないかの如く事が進行することだろう。つまりフーコーが指摘しているように、その効果とは次のようなものである。「そこから、一望監視施設のより大きい効果がある。つまり権力の自動的機能を実際にする可視性の意識的で恒久的な状態を拘留された人に引き入れることである。監視がその行動において中断するとしても、その効果において恒久的であること、権力の非の打ち所がない状態はその行使が現にあることを無駄なものにしようとする、この建築上の装置はそれを行使する者と無関係に権力関係を作り出し維持する機械であるということ、要するに拘留された人は彼ら自身がそれを支えている権力の状況にとらわれているということを引き起こすのである。」(SP pp.202-203)

ここにおいて注目すべきは、本質的には暴力的でありながら、表面的には暴力的ではないということである。フーコーも言うように、「重要な装置である、というのもそれは権力を自動化し没個人化するからである。」(SP p.203)

つまり暴力が存在するというと、いささか穏当さに欠ける行為が伴うように思われるし、場合によっては視覚的にも衝撃を与えるような事態になったりすることもある。このような場合、特にそのような暴力が具体的に行使されるということになると、それに対する反発も生じるし、身の安全を守るということから何とかして抵抗しようという行動に出ることも当然のこととして考えられる。ところが、本当は暴力が介在するもしくは根底に確固たるものが存在していても、表面的にはあたかも暴力など存在することはなくあたかも平穩に全てが進行していると思える状況においては、むしろそれを指摘することの方が否定されるといった具合である。問題はそこなのだ。暴力が存在しているにも拘らず存在していないかの如く事態が推移していくという点に注目しなければならないのだ。そしてまたこのような一望監視施設は実際問題として建物や人員が必要であり、そして権力と我々が認識し得るものが必要となってくるのである。これは我々の日常生活においては一般的ではない。少なくとも我々が論考の対象とする『ナジャ』のテキストにおいて主たる舞台として出現するわけではない。従って、このような建物や人員を伴わないより日常的な権力関係について考察していく必要がある。フーコーは学校や軍隊における規律や訓練について指摘しているが、問題なのは権力があたかも集団の外部から抑圧的に行使されるような印象があるが、実際のところ権力は分散し遍在しているということである。ドゥルーズ=ガタリはフーコーの権力論に言及しながら、次のように指摘している。「権力のそれぞれの中心はそれ故分子状で、最早拡散して、散らばって、減速され、小型化され、絶えず場所を移され、細かい分割によって動き、詳細にそして詳細の詳細に作用するものとしてしか存在しない微細科学的な組織に行使される。フーコーによる<訓練>もしくは小権力の分析(学校、軍隊、工場、病院等)は、再結集や集積、そしてまた逃亡や脱走が対立し、そして逆転が生じるこれらの<不安定な中心>を示している。それは最早学校の先生<そのもの>ではなく、生徒監督であったり、優等生であったり、怠け者で出来の悪い生徒であったり、管理人などであったりするのだ。それは最早将軍ではなく、下級士官であったり、下士官であったり、自称兵士であったり、性格の悪い人もそうだし、自らの偏向や、極端さや、葛藤や、力関係を伴っ

たそれぞれなのである。」(MP p.274)

ここにおいてサルトルの存在論が最早解決出来ない問題となってきたのは、支配する者・支配される者や命令する者・命令される者といった形で権力の所在を検討することができないからに他ならない。また規則といったものが表向きのものであれ裏側に存在するものであれ、つまり表向きというのは法律であり、道徳であり、社会通念といったもので、社会秩序の維持のためには守ることが求められているものであるが、場合によっては地域や集団において融通を利かせるとか実状に合わせるとかいった各自で若干違った規則が設けられるということもあるだろうが、いずれにせよ規則が前提としてあり、明文化されているされていないに拘らず、その規則を守ることが少なくともある共同体においては求められるというわけであるが、規則が明らかであれば違反しないように努めることもできるが、そのような規則がないにも拘らず結果的には違反してしまうという事態がある。規則が明確ではないために、その規則を守らなければならない集団自体特定することが不可能と思えるわけであるが、違反者にはそれなりの処罰が加えられるわけであるから、集団は存在するのである。言うまでもなく暴力そのものであり、可視的ではないために対処が難しいという事態にもなる。ドゥルーズ=ガタリの指摘を借りるなら、「現代の権力の行使はいかなる点においても<抑圧かイデオロギーか>といった古典的な二者択一に還元されるものではなく、言語、知覚、欲望、運動等に関わり、ミクロ的な構成を通る規格化、転調、モデル化、情報の過程を前提としているのは最近強調されたところだ。強化されお互いに栄養とすることをやめない両立した二つの部分として、両極に押しやられた、拘束であると同時に隷属から成っているのがこの全体なのである。」(MP pp.572-573)

つまり権力は権力者が独占して保有するというわけではなく、我々の身近において成立するものなのである。ただ権力者の場合は一人だけで成立し得るが、これは一種の集合体という形をとることになる。そして集合体といえども組織化されたものではなく、いわばその境界も明確ではないということになる。ある個人がその集合体の中に入っているかどうかということも恐らく明確ではないだろう。最終的にはその個人の意識がその集合体の中に組み込まれているかどうかといった話になるのではないかと思われる。

さて以上の議論を踏まえた上で、我々は再び『ナジャ』のテキストを前にすることになる。『ナジャ』はナジャの物語が中心になっているため、権力の問題とは直接関係ないようであるが、実は狂気の扱われ方ということにおいてまさに権力が捉えられることになるのである。ブルトンはナジャと会わなくなってからも手紙のやりとりはあったようで、ナジャはブルトンに対して自分を捨てたりすれば気が狂ってしまうだろうという内容の手紙を送っているのである(PI p.1512)。ただしこの手紙のことについては『ナジャ』のテキストにおいては全く触れられていず、その辺りの経緯がわかるのは、次のような記述からである。つまりブルトンはナジャと毎日のように会っていたことを示す記述から、テキスト上においても行間を空けるなど見た目にも距離を取っていることかわかる記述へと変化していくのであるが、その五段目くらいのところで、「今から数か月前、ナジャは気が狂っていると私に教えにやって来た人がいた。彼女は自分のホテルの廊下で思わずしてしまったように思われるのだが、奇行の結果、ヴォークリュエーズの精神病院に監禁されなければならなかったのだ。」(PI p.736)

狂気の扱われ方については、フーコーの『狂気の歴史』を参照しなければならない。フーコーによれば、狂気は近代になって正気と狂気を分離することによって排除されることになる。それまでは狂人は共同体内部において共存していたのである。ところが 17 世紀以後、狂人は社会において居場所を失うことになるのである。そして狂気は理性によって捉えられ、科学的医学的見地から治療されるべきものとして捉えられることになる。治療されるべきであるということなら理解し得るとしても、社会から排除されるといった事態を可能にしているのは、ただ単に理性の働きによるものではなく、そこに権力が介在しているのを見失ってはならない。つまり狂気を正気ではないという形で設定するだけでは、狂人を社会から排除してしまうことはできないのである。このように権力は確実にその力を発揮しながらも、あたかも暴力的ではないかのように機能しているのである。そしてこの点についてブルトンは自覚的であって、『ナジャ』のテキストにおいてブルトンは次のように書いているのだ。「そのように理解するようになっていくという意味で、自由意志の監禁は最早存在しない、つまり、公道で犯されているからには客観的に確認された事実としてとられ違法性がある常軌を逸した行為は、他のものより千倍も恐ろしいこれらの拘留の原因であるからだ。しかし私に言わせれば、全ての監禁は任意のものなのである。私は何故一人の人間から自由を奪うのか理解できないままである。彼らはサドを監禁した。彼らはニーチェを監禁した。彼らはボードレーを監禁した。夜不意打ちをしにやって来て、拘束服を渡すかあるいは全く別の方法で押さえつけることにある型にはまったやり方はポケットの中にピストルをすべりこませることにある警察のそれに相当する。」(PI pp.739-740)

ただこのような権力の捉え方は、既に指摘したベンサムの一望監視施設と同様に、建物と人員を伴った権力の作用として可視的なものではある。ところが権力は最早そのような対立する図式のみでは捉えることのできないものであることも同様に既に指摘したところであって、ドゥルーズ=ガタリの観点からも検討を加えなければならないだろう。それは他の人との関係、特にどのような言動が為されるかといった視点から見直されるべきであって、例えばフーコーの言う狂気の扱われ方については、サン・タンヌ病院のクロード教授と患者とのやりとりを読めばわかるだろう。つまり「<人はあなたに悪いことがあればよいと願っている、そうじゃないかね。—いいえ、先生。—彼は嘘をついている、先週彼は私に人が自分に悪いことがあればよいと願っていると言ったのだ。>あるいはまた、<あなたはいろいろな声が聞こえるかね、ええっと、それは私のような声かね。—いいえ、先生。—よろしい、彼は幻聴がある。>など。」(PI p.736)

ここにおいて権力を有している者の抑圧的言動を見て取ることは容易だろう。まさに暴力的と形容することも可能な程である。ところがそのような権力関係にはない者たちの言動についても同様に検討を加えなければならないであろう。ナジャが精神病院に入れられたことについて周囲の人たちの反応を記した箇所注目しよう。「私以外の人たちは既にある全てのことの避けがたい結果としてきっと彼らには思われるに違いないであろう、この事実について非常に無益になんのくんのと言うだろう。最も経験深い人たちでさえ、私がナジャについて報告したことの中に、既に精神錯乱の見解に合わせて考慮するのがふさわしいものを急いで探そうとするだろうし、恐らく彼らは彼女の生活に私が介入したこと、これらの見解の展開に実際に好都合

な介入に、ひどく決定的な価値を与えるだろう。<ああ! いやはや>とか<十分想定できたでしょう>とか<私もそうじゃないかと思っていた>とか<こういう事情だから>とか言う人たちに関することについては、私が彼らを放っておく方がいいと思っているのは言うまでもない。」(PI p.736)

各人の考え方や感じ方は様々であって、どれが正しいとか間違っているとか言うことは容易ではないし、正当性を欠くことにもなるだろう。ここにおいて問題となってくるのは、ナジャの件に関して権力を行使しているという点である。つまり彼らは意見を言っているのではなく権力を行使しているのである。それはナジャが精神病院に入るのが当然であるという状況を作り出し確実なものとしているからである。このように暴力的といっても、実力行使をしているわけでもなく、表面的にはただ自分の意見を言っているにすぎないように思われるが、社会的な圧力を形成しているのである。そしてこのような圧力は狂気に対するものだけではなく、つまり精神病院に入るべきか否かといった判断の問題ではなく、人はどうあるべきかという圧力装置として機能することになるのである。ブルトンがナジャの入院について触れた後で、社会の仕組みについて次のように書いているのだ。「このような環境に適応するために、というのものとにかくそれは環境であるからだが、そのようなものとして、それに適応することがある程度要求されるのである。精神病院に入り込んでしまったら感化院で悪党が作られるのと全く同じように狂人が作られる (下線原文) ということを知ることになる。微罪、礼儀や常識に最初外面的に怠ったために、接触が有害でしかあり得ない他の人物たちの中にある人物を突き落とし、とりわけ道徳的もしくは実際の感覚がその人物よりもちゃんと確立した全ての人々との関係をその人物から故意に奪ってしまう社会的管理と言われるこれらの機関以上に耐え難いものはないのではないか。」(PI p.736, p.739)

つまり、あたかも表面的には何ら暴力的ではないかのようでありながら静かに人の自由を奪ってしまう装置が社会的に存在するという点なのである。ここにおいて暴力とは何ら身体的なものではなく、意識を操作し支配するという点において精神的なものなのである。仮にそのような暴力の存在に気付き、何らかの対抗手段を講じたいと思っても、その暴力装置は社会において網の目のように配置されているため、何らかの主張をしたとしても効果はなく、従って文字通りの暴力的手段に訴えるしかないという事態にも至るわけであるが、それこそ暴力であると非難されて社会的に排除されるという逆転の構図を描くことにもなってしまう。そもそも何故このような暴力装置が社会において可能になるのかについては、既に指摘したように、表面的に如何に人間性を主張していても根底にある欲動を否定することも無視することもできないということを指摘しておかなければならないだろう。またこのような暴力装置といったからくりの気付き、その上で指一本動かすことなくこの社会において暴力的であることも可能であり、その際口にされる言葉が正義とか公平とかいった類のものであることもあり得る話なのである。従って人々は公然として自らは安全な状態において暴力的でありかつ暴力を行使することが可能となるのであって、このような状況の下ではブルトンの言う「最も単純なシュルレアリスムの行為」も閉塞感を打破するためには必要という気にもなるだろう。とはいえ、表面的に暴力的であるのではなく、人々に浸透した暴力装置に対抗し自らの自由と主体性を取り戻

し確立するためには、どのようにすればいいのかを考えていかなければならない。ブルトンは『ナジャ』においてどのような戦略を考え提示したのか。我々は第二部においてそれを探っていくことになるだろう。

第二部 身体を解体する

第三章 ドゥルーズ=ガタリの「器官なき身体」で『ナジャ』を読み解く

暴力、そしてそれが肥大化しもっともらしさを装ったものとしての権力が厄介であるのは、結局のところ人々の身体の自由を奪うという点にある。第二章において暴力が身体的ではなく精神的に行使されることを指摘したが、それはあくまで行使する側の手段の問題であり、行使される側としては身体的なものである。この点について明らかにするために、まずサルトルの存在論を再び取り上げることしよう。サルトルは羞恥について次のように説明している。

「鍵穴の上に体がかがめて私がいる。突然私には足音が聞こえる。羞恥のため身震いが体を駆け巡る。誰かが私を見たのだ。私は姿勢を正し、人気のない廊下に目を走らせる。取り越し苦労だったのだ。私は一息つく。そこには一人相撲に終わった経験があったということなのか。/ そこのところをもっとよく見てみよう。勘違いとして明らかになったことは他者に対する私の対象としての存在なのか。全然違う。他者の存在はこの取り越し苦労が私の企てを私に諦めさせる結果に十分なり得ているということを疑うところではない。仮に私が逆にそのまま根気よく鍵穴を見続けているとすると、私は私の心臓がときどきするのを感じるだろうし、少しの音でも、階段のきしむちよとした音でも聞き耳を立てるだろう。他者が私の最初の不安とともに消え去ってしまったところか、今至る所に、私のいる下の階、上の階、隣の部屋にいるし、私は私の対他存在をひどく感じ続けるのだ。私の羞恥が消え去らないということさえあり得るのだ。私が鍵穴の方に身がかがめること、私が私の対他存在を感じる（下線原文）ことを最早やめないのは、今では顔まで赤くなることである。私の可能性は<弱まる>ことをやめないし、誰かいる<かもしれない>階段から、人が身を隠している<かもしれない>あの暗い角から私に向かつての距離は広がることをやめない。更にもっと言うなら、私がちょっとした物音でびくびくするとか、階段がきしむ度に誰かが見ているのではないかと私に思わせるのは、私が既に視線を向けられている存在という状態にいるということである。従って、要するに、幻影として現われ、その時は取り越し苦労のため一人相撲に終わったものは何だったのか。」(EN pp.336-337)

ここにおいて実際には存在していない他者の現前が「私」の気のせいだと認識するに留まらず、それを羞恥とすることも場合によっては気のせいだと指摘することは可能なのではないか。確かに現実的問題とは別に、羞恥ということが全ては当事者の内心の問題として捉えられるのは、結果的に身体に何ら危害が加えられないからであり、逆に言えば危害が加えられない範囲においては内心の問題として処理されることが可能だということである。ところが権力が絡んでくると最早内心の問題としてのみ処理してしまうことはできない。そもそも暴力というと身体に対して加えられるもので、既に指摘した精神的なものも暴力がそれだけ薄められたというわけではなく、行き着くところは同様に身体的なものなのである。この点については刑罰の歴史において前近代の刑罰が残忍な身体刑であったことをまず想起すべきだろう。確かにこれは

あまりに残忍で非人間的なものであるということから、刑罰は身体的なものから精神的なものになったとする指摘がある。フーコーは『監視することと処罰すること』において次のように書いている。「刑罰の人道化の下で、見出されるものは、罰する権力の打算的な経済学として、〈穏やかさ〉を正当化し、その上要求するこれら全ての規則である。しかしそれらはまたこの権力の適用の問題点において置き換えを必要としている。それは刑場の規則において過度な苦痛や明らかな報復の祭式の動きを伴った身体であっては最早ならない。それは精神とかむしろ控えめではあるが全ての人々の精神において必要性と明証性を伴って流通する表象と記号の戯れであること。最早身体ではなく、魂であると、マブリーが言っていた。」(SP p.103)

刑罰の身体的なものから精神的なものへの移行は、権力が暴力の直接的な作用から一見背後に回り表向きには穏やかなものになったことと呼応する。しかしそれはあくまで表面的なことであって、確かに残忍さという点は十分回避されるようになったということは言えるだろうが、結局のところ権力は身体に行き着くのである。これは権力が行使される手段の問題であって、技法上のことにすぎないのである。フーコーはこの点について次のように説明している。「法律的には、拘留はまさに自由の剥奪であり得る。それを確実にする投獄は常に技術的な工夫を伴った。明らかな規則、苦痛の儀式から大量の建築物の中に隠され行政の秘密によって守られた刑務所の刑罰への混在した技術を伴った体刑の移り変わりは、未分化で、抽象的で漠然とした刑罰への推移ではない。それは罰するある技術から別のものへの、それと同様に巧みな推移である。」(SP p.261)

どのような刑罰が残忍で非人間的であり、どのような刑罰が精神的で人間的であるかといった判断は措くとして、たとえばに残忍さを消し去った刑罰においても身体を自由を奪うという形で行なわれるものは結局のところ身体的なのである。このように考えるならば、主体性を論じる上でまず確保されるべきは身体を自由であり、更にその上でその身体をいかに捉えていくかという問題に他ならない。ここに至って我々はようやく『ナジャ』のテキストに対峙できるわけである。ここにおいてまず指摘できるのは、ブルトンは『ナジャ』においてナジャの身体としての器官に注目しているということである。10月4日のナジャとの最初の出会いにおいて、まず注目され語られるのは目でありそして手である。「目から始めてしまったのだが、完成する時間がなかった人のように、奇妙に化粧されているが、目の縁は金髪女性にしては非常に黒い。縁であって、いささかも瞼ではない(中略)。私はそれまで一度もこのような目を見たことがなかったのだ。」(PI p.683, p.685)

「彼は手を取ると、彼女がどれくらい変わったように見えたか言わずにはいられなかったし、これらの手に視線を向けて、それらが非常に手入れされているのを見て驚いた(それらは今ほとんどそうではない)。」(PI p.685)

とりわけ目であり、ナジャの目が写真としてもテキストに挿入されていることからその重要性は否定できないだろう。ナジャとの出会いにおいて、まず目でもって語られることに注目し、我々は目を中心として身体的な器官がどのように記述されているかを見てみることにする。対象とする箇所は、さしあたってはナジャの物語として捉えられている本編とする。まずブルトンがナジャと出会う前にラファイエット通りを歩いていた時、「歩道にいる人たちは握手をして

いた」(PI p.683)とあるが、これは意味がないだろう。そしてナジャとの出会いである。「彼女は他の全ての通行人とは反対に、顔を高く上げて進んでいる」(PI p.683)

その後は既に言及した目の描写である。ブルトンはこの目のことが気になって仕方がない。「私は彼女をもっとよく見る。これらの目の中にこんなに異常な何が通り過ぎることが可能なのか。そこには漠然と苦悩と同時に明快に誇り高さを持つ何が映し出されるのか。」(PI p.685)

この後は既に触れた手についての描写である。この後パン屋の主人が彼女の方に目を上げるという箇所も問題ないだろう。ナジャが食事をとる場所をブルトンから聞かれ、「どこ(伸ばした指で)、そこかそこ(最も近い二つのレストラン)、私のいるところ、えーっと。いつもこんな風なの。」(PI p.688)

さりげない箇所ではあるが、後において意味を持つてくるようでもあり示唆的である。10月5日、ブルトンは前日に約束した通りナジャと会うのであるが、この時のナジャの様子が次のようである。「結構優雅、黒と赤の服、彼女が脱ぐ非常に似合った帽子、信じられないくらいに乱れたのを諦めてしまったカラスムギの髪を見せる」(PI p.689)

ブルトンの持って来た本を読みながら「二番目の四行詩の最後で、彼女の目は濡れて、森の幻影でいっぱいになる。」(PI p.689)

ナジャはブルトンにかつての知り合いの男の話をするのであるが、その男性はアメリカ人で、ナジャを自分の娘と混同してレナと繰り返し呼びかけるということがあった。「その時私は彼の目の前、こんな風に、彼の目の非常に近くで手を数回動かしてこう言っていたものよ。いいえ、レナじゃなくて、ナジャよ。」(PI p.690)

この後ナジャはある遊びを提案するのであるが、それはブルトンが『ナジャ』のテキストにおいて注で「シュルレアリスムの渴望の極限」(PI p.690)と表現する程のものである。「遊びよ。何か言って。目を閉じてそして何か言って。こんな風に(彼女は目を閉じる)」(PI p.690)

この箇所は目を閉じることがシュルレアリスムの世界への移行を可能にするように思われ、示唆的である。10月6日において、ブルトンはナジャと会う約束をしていたが、その約束よりも前に偶然路上でナジャと出会ってしまう。「私は彼女と出会った時に、私が彼女に貸した『失われた足跡』を一冊彼女が手にしているのに気付いた。」(PI p.691)

これはとりたてて注目すべき箇所でもないだろう。そして次の箇所は示唆的であって、目が何らかの意味を持っていることを我々に感じさせる。「次に最早長いこと会っていなかったか、再び会うことを予期していなかった誰かの前にいる時のように、そして<自分の目を信じない>ということをはっきりと知らせるためのように、彼女の目は閉じられそして非常に素早く開けられる。(中略)しかし突然彼女は身を委ねて、完全に目を閉じ、唇を差し出す」(PI p.693)

ここにおいてナジャの目は、世界と世界を結ぶ出入口のように思われる。この後ドーフィエヌ広場に行き、妙な気配を感じて、そこから離れていくのだが、その途中で超常的な体験をする。この辺りの記述が次のようなものである。「彼女は私が彼女を引きずって行かないように両手で鉄柵を掴む。(中略)私は心配して、そして片手ずつ引き離して、私はついに彼女に私について来るよう強いる。」(PI p.697)

この放心状態になったナジャの口から出てくるのが次の言葉である。「あの手、セーヌ川の

上のあの手、何故水の上で炎をあげて燃えるあの手なの。火と水は同じものというのは本当なの。でもあの手はどういう意味なの。あんたはどんな風にあれを解放するの。だからあの手を私に見させて。(中略)でもあれはあんたにとってどういう意味なの、水の上の火、水の上の火の手。」(PI p.697)

これに対するブルトンの答えは示されていないのだが、我々はこれについての解答を第四章において見出すことになるだろう。従って重要であることを確認しながら、次の箇所を見ていくことにしよう。ナジャには娘が一人いるのだが、その娘に関することである。「それは彼女に自分の小さな娘のことを考えさせるが、かなり慎重に子どもがいることを私に教えてくれていて、彼女は大好きなのだが、それはとりわけその子どもが他の子どもたちようではほとんどなくて、<人形の目の後ろにある>(下線原文)ものを見るためにその目をいつも取り除くことを考えているため>なのだ。」(PI p.698)

既に指摘したように、目は別の世界に通じる出入口のようなものであることがここにおいても示されている。10月7日の記述において「彼女は今手の中で一通の手紙をしわくちやにしていてそれを私に見せる。」(PI p.702)

これには大した意味はないであろう。そしてこの日の最後の記述であるが、「恭しく私は彼女の非常にきれいな歯に接吻する(中略)。それはつまり、彼女の歯が<ホスチアの代わりをしていた>という、何か聖なるものの印象の下にこの接吻が彼女を託しているということなのだ、彼女は私に説明する。」(PI p.703)

ここでは身体的器官に意味があるということを物語っている。10月9日の最後の記述として、「私が目の前で持っている封筒の裏面に天秤が印刷されているのを私は不安とともに注意して見る。」(PI p.705)

これは別段意味はないであろう。10月10日の記述において、ブルトンとナジャがレストランで夕食をとっているのだが、その時の給仕の男について「その時彼はナジャを熱望し、めまいに襲われるようだ。」(PI p.707)

またナジャの話として「3時に、<ル・ペルティエ>という地下鉄の駅の出札口で新しい2フラン硬貨を渡され、階段に沿って彼女は手の中でそれをきつく持っていた。」(PI p.707)

これらについては大した意味はないように思われる。またナジャは「大の仲良し」と呼んでいる男の話が始めるのだが、「彼は彼女に一日をどう過ごしたかを詳細に語らせ、よいと判断したことは称賛し、それ以外は非難していた。そしていつもその後頭の中の局在した身体的苦しみは禁止されていたはずのことを彼女がまたするのを妨げていた。この男は、白いひげに隠れ、彼女が彼について何も知らないことを望んでいたが、彼女にとっては国王のように見えている。」(PI p.707)

通常は精神によって為される判断が身体的に行なわれていることを示すものである。そしてこの後、再び手についての記述が始まる。「彼女は再び非常にぼんやりして私に一つの手がゆっくりと描く稲妻を空の上で追うように言う。<いつもあの手だわ>。彼女は私にドルボン書店の少し向こうにある貼り紙に実際にある手を私に見せる。確かに、我々のすぐ上のところに、私にはわからない何かをほめそやしながらぴんと立てられた人差し指がある赤い手がある。彼女

は絶対その手に触れなければならない、彼女は跳び上がって達しようとしなければならない、そして彼女は自分の手をぴったり張り付けることができるのだ。〈火の手、それはあんたの主題に関わること、わかる、それはあんたなの〉。彼女はしばらく黙ったままでいて、私は彼女が目に涙を浮かべていると思う。(中略) 手もそうだけれど、これは火よりも本質的じゃないわ。私が見えるのは、こんな風に手首から出ている炎なの (中略)。この炎はすぐに手を燃えさせて、瞬く間に消滅させてしまう。」(PI pp.707-708)

そしてこれには注があって、「多くのアラブ人の家の戸口には、多かれ少なかれ図式的な構図で、赤い手つまり〈ファトマの手〉が刻み込まれていると、人は私に言う。」(PI p.708)

既に指摘したように、後において大きな意味を持つてくることがわかる。10月12日の記述においては、まず「サン・ラザール駅、サン・ジェルマン行き、しかし電車は我々の目の前で出発する。」(PI p.713)

これはとりたてて問題とすべきでもないだろう。待合室にいるブルトンとナジャを駅にいる人たちが振り返ってまで見ていくのだが、その時のナジャは次のように言っている。「彼らはそれを信じることができない、見た通り、彼らは私たちが一緒にいるのを見て落ち着かないのよ。あんたにもあるし、私にもある目の中のこの炎はすごく珍しいのよ。」(PI p.713)

目が別の世界への出入口であり、そこを通して別の世界を垣間見ることができるということだろう。そしてまた次のような発言もある。「あそこ(昇降口のガラスの上部を私に示しながら)、誰かいるわ。頭が逆になっているのをすごくはっきりと見たところなの。」(PI p.713)

確かに尋常ではない世界が出現しつつあるように思われる。奇妙なことなので、ブルトンがそれを確かめようとする。「気休めに、私は再び外に身を乗り出す。我々の上で、車両の屋根の上に腹ばいに横になった男の頭が引っ込むのを、非常にはっきりと、見る時間が私にはある(中略)。次の駅で、ナジャが昇降口のところにいて、私が窓ガラスを通して、旅行客たちが降りるのを眺めている時」(PI p.713)

ナジャは嘘をついているわけでもなかったのだが、結局のところ大したことはなかったのだ。ただそれがシュルレアリスム的とも言うべき世界への橋渡しをするかのように機能していることは言えるだろう。そして日記形式で語られるナジャの物語であるこの最終日の10月12日の最後において、目や手といった身体的器官でもって語られてきたナジャの存在が消え、あたかも記号化されるかの如き記述が示されることになるのである。ブルトンは気分転換の意味もあって、ナジャとサン・ジェルマンに赴くことになる。「我々は一時期に我々をサン・ジェルマンに運んでくれる次の電車を待つことを余儀なくされる。城の前を通りながら、ナジャは自分がマダム・ド・シュヴルーズになったと思った。何という優美さで彼女は帽子の実在しない重たげな羽毛の後ろに自らの顔を隠していたことか!」(PI p.714)

そしてこの時点を境にして、テキスト上においてナジャは現前しなくなる。実際10月12日以降もナジャは存在し続けるわけであるし、テキスト上においてもナジャについての言及は存在する。ところが顔もあって手もあってという器官を持った一個の人物として、テキスト上で描写されることはなくなるのだ。それは実際ナジャの物語の最後において、「誰だそこにいるのは。あなたなのか、ナジャ。あの世 (下線原文)、全くのあの世が現世にあるのは本当なのか。

私はあなたの言うことが聞こえない。誰だ。私一人なのか。私自身なのか。」(PI p.743)という叫びを投げかける時、ナジャが普通の姿形をした存在ではないということが明らかとなってしまふ。もちろんナジャ自体が消滅してしまったというわけではなく、まさに「器官なき身体」として捉えられているというわけである。つまりブルトンとして捉えるべきはナジャをナジャたらしめている欲動、欲望といったものであり、そこにこそ注目すべきであるということである。しかし何故このような操作をしなければならなかったのか。ドゥルーズも指摘しているように、「他者は、私・自我という心的体系において、従って巻きつきの、包み込みの、係わり合いの中心として機能する。」(DR p.335)

つまりサルトルの存在論にあるように、「私」が主観である時に他者が客観となり、他者が主観である時に「私」が客観となるという構図は、いささか単純化されすぎであったのだ。例えばどう接していいかわからない他者を目の前にした時、実は他者がどのように機能するか理解されていないのである。つまり「それぞれの心的体系において、現実を取り囲む可能性のうごめきがある。しかし我々に機会を与えてくれるものは常に他人なのである。他者は可能性のうごめきを構成する表現性から分離され得ない。我々が他者の身体を解剖学上の部分としての耳や目のように、物として考える時でさえ、我々はそれらが表現する世界を極端に単純化することにも拘らず、我々はそれらから全ての表現性を取り除くことはないのである。」(DR p.334)

だからこそナジャをナジャとして理解し把握するためには、現実の存在であるナジャを一旦括弧の中に入れてしまうという手続きが必要だったのである。つまりドゥルーズの表現を借りるならば、次のようなことである。「そんなわけで、他者もそれとして把握するために、我々は経験の特別な条件を、たとえそれが人為的なものであったとしても、要求する権利があったのである。つまり表現されるものが表現するものの他に未だ（我々にとって）存在していない瞬間である。——可能性のある世界の表現（下線原文）としての他者。」(DR p.335)

器官なき身体としてナジャを捉えるその有効性は、既に示したナジャの物語の結末において明らかになっているように思われるが、ただしそれは10月12日の記述からそのまま結末へと移行した場合に整合性を持つものであって、実は10月12日以降ブルトンがナジャについて距離を置く形で反省的に捉える箇所が存在するのであり、その部分を考え併せるなら別の展開にもなる可能性があるのである。我々はこのにおいて、器官なき身体概念を宙吊りにし、改めて目を中心とした身体的器官に注目してテキストを読み進むことにしよう。

第四章 ジジェクの「身体なき器官」で『ナジャ』を読み解く

10月12日の記述の後、テキスト上においては点線があり行間も設けられ、明らかにそれまでとは違った展開が予測される。この後のテキストの冒頭において、ブルトンは次のように書くのだ。「ここにおいて死に物狂いのこの追求が終わるといふことがあり得るのか。」(PI p.714)つまり内容や記述方法が変わったとしても、ブルトンの求めるものには変わりがない。むしろ記述方法を変えたということから、真相により近付いているのではないとも考えられるくらいである。ここにおいてブルトンは次の問いを投げかける。「現実の前で、私が今知っている狡猾な犬のようにナジャの足下で横になったこの現実の前で、我々は誰だったのか。」(PI p.714)

そしてその上で、ブルトンはナジャについてこのように書いているのだ。「巨大な希望の翼の

はばたきが恐怖の音である他の物音とほとんど区別がつかない世界で私は朝彼女の羊歯の目が開く（下線原文）のを見たが、この世界では、私は未だ目が閉じるのしか見たことがなかったのだ。」(PI p.714, p.716)

既にテキストにおいては現実的存在ではなくなっているナジャについて、その精神的な面を指摘するのではなく、まさに身体的な器官である目が依然として存在していることを明らかにしているのだ。つまりここにおいて「器官なき身体」ではなく、スラヴォイ・ジジェクの言う「身体なき器官」が見て取れるわけである。身体なき器官というのは、ジジェクも例として挙げているように、『不思議の国のアリス』の中でチェシャー・ネコの身体が最早存在しなくなっているにも拘らず、依然として残っている微笑というか口のようなものである。しかし何故目なのか。それは映画を撮影する時のカメラを想起すれば容易に理解できるように、主観が問題となっているからである。目はまさに主観的視点を形成するわけだが、それはナジャの主観に他ならない。シュルレアリストたるブルトンは、シュルレアリスム的な視点から世界を眺めたいと思っている。我々が通常理解している世界とは全く違った様相を呈するのではないか。そういった目で世界を見てみたいと思うわけである。そんな時にシュルレアリスムを体現したかのような人物であるナジャが目の前に現われたわけであって、そのナジャの目を通して世界を見ることを試みるわけである。ブルトンは愛を通してこの現実において幸福を見出そうとするし、ナジャは実際に魅力的な女性であり、我々は誤ってブルトンを主体としナジャを客体と捉え分析しようとしてきた。これはブルトン自身が陥っていた錯覚であって、我々はブルトンの錯覚に付き従っていたにすぎないのである。ブルトンは10月7日の記述において、「彼女は私をどのように見て、私をどのように判断しているのか。もし私が彼女を愛していないのなら、私が彼女に会い続けることは許し難い。私は彼女を愛していないのか。」(PI p.701)と自問するわけで、それにも拘らず、ナジャと会い続けるのであるから、我々は軌道を修正することなく主客関係でもってテキストを分析することになるのだ。ところが第三章において示したテキストにおいて出現する奇妙な現象の数々は、あくまでナジャの目を通してブルトンによって書き取られたものであることを確認しておかなければならない。そして更に指摘しておくべきであるのは、『ナジャ』のテキストはナジャの目を通して見た世界をブルトンがただ書き取っているにすぎないというわけではないのである。10月12日の最後の記述において、ナジャは自分がマダム・ド・シュヴルーズになっていると思ったと書き、その上でありもしない帽子の重い羽毛のことを書き記すのである。ナジャ自身がマダム・ド・シュヴルーズになったと思うとしても、存在もしていない羽毛を見たのは誰か。仮にそれをブルトンだとしても、ブルトンはその羽毛が「存在していない」ことを知っているわけで、ここにおいてブルトンのように身体を伴っているのではないいわば身体なき器官としての目の存在を指摘しなければならないわけである。もちろんブルトン自身幻覚を見ているわけではなく、ナジャの目を通して、つまりナジャであるならばこのように見たであろうという視点を成立させているわけである。つまりブルトンはナジャと出会うことによって、ナジャの目を通して世界を見ることを体験し、ついにはナジャの目を通してブルトン自身が世界を見るという手続きが成立することになるのである。ここにおいてブルトンとナジャのみを捉え、そこに主体と客体の関係を見て取ることが誤りであ

ることが明らかとなるであろう。そしてこのように身体なき器官が独自の働きをするのは目に限らず、手に関しても指摘できるのである。手については第三章において示したように、目に劣らずテキスト中に出現するのであるが、その意味するところは明確ではない。主としてその手はナジャの手でありブルトンの手であったわけだが、仮に目のところで成立したように、主体を見失った手がいかなる働きをするのか。ブルトンがナジャの手を借りるといった記述も見当たらない。ところが、ナジャの物語が終わり、『ナジャ』全体として見れば第三部にあたる箇所、まさに身体なき器官としての手が出現するのである。ブルトンはナジャの物語を見直すことを試み、ナジャの物語の舞台となった街が自らに対して閉ざしているように見えたことを明らかにしている。「しかし外的世界ではこの馬鹿げた話はこんな風になるのではないか。天気はこんな風に、犬を外に出すべきではない天気になる。」(PI p.748)

このような街の変化に対して、ブルトンは自らの体験の中にある街の様子を大事にしようと心に誓うのであるが、ちょうどその箇所である。「私はこの心の風景を下書きの状態にしておく、その境界線は私を落胆させるのだ(中略)。そこでは素晴らしくまた裏切ることのない手がまだそう前ではない頃に<黎明>というこれらの言葉を書いている空色の広大な標識板を私に指し示したのだ。」(PI p.749)

この標識板の写真はテキスト中においても挿入されていて、その撮影は一時期ブルトンの愛人でもあったヴァランティエヌ・ユゴーによるものであるが、この手が彼女自身のものであるというわけでもあるまい。というのも、この箇所の後、テキスト上では点線が付され行間も与えられた後の記述で、ブルトンは「君」に対して語りかけるのであるが、先程の手の持ち主がまさに「君」であることがわかるのである。ブルトンが「君」に語りかけたいと思ったのは、ナジャの物語ではなく、ドゥルイ氏に関するもので、とりあえず意味付けをしておくなら自己同一性に関する話であったと言えるだろう。自己同一性とはこの『ナジャ』のテキストの本文がまさに「私とは誰か」という問いかけで始まることから繋がっているわけであるが、この『ナジャ』のテキストが結局のところ「君」に到達することを予期していたかのような展開なのである。「この話は、私もまた、君(下線原文)に語りたいという欲望に従ったわけで、その時私は君のことをほとんど知らなかったし、君も最早思い出すこともできないが、偶然のように、この本の始まりを知っていて、こんなにも都合よく、こんなにも激しくそしてこんなにも効果的に私のところに君が介入してきたのは、恐らく私がこの本を<扉のように自由に入出りできる>ようにしておきたかったということとこの扉から恐らく君しか入ってくるの見ないだろうということを私に思い出させるためだったのだ。入って来るのも出て行くのも君だけ。ここで私が言ったことの全てから君は<黎明>の方に挙げられた君の手の上でわずかの雨しか受け取らなかっただろう。」(PI p.751)

ここにおいて重要であるのは、目にしても手にしてもブルトン自身のものではなくて、目はナジャの目、手は「君」の手であるということである。確かに人は自分の目を見ることはできないのであるから、自分自身が主体であり、目を客体としなないとしても少なくとも媒体として世界を見ていくならば、どうしても他者の目を持ち出してこななければならないだろう。これは自己同一性の問題について、ラカンの言う鏡像段階と同じ構造になっている。仮に自分自身を

鏡で見るとしても、鏡という他なる媒体が必要であるわけだし、他者を通して、例えば他者の欲望が自らの欲望となるという場合においては、他者がどうしても必要となってくるのである。このように考えるならば、『ナジャ』のテキストの構造は明らかになったかのように思われるが、少なくともブルトンが『ナジャ』のテキストを書き終えつつある段階において、ブルトンにとって理想の女性とも言うべき「君」が出現することによって、手は理想的な働きをしたと言えるのであるが、ナジャの目について事はそれ程単純ではない。これは何もブルトンの自己同一性にとって、ナジャはまさにその理想の存在であるかどうかという話ではない。10月12日の記述を最後にして、ブルトンはナジャについて距離を置いた記述を展開するわけであるが、その中でブルトンは「本当のナジャとは誰か」(PI p.716)という問いかけをするのである。具体的に言うと、「私には何かわからない石の廃墟を探しに、ある考古学者と一緒に、フォンテーヌブローの森の中を、一晩中さまよったと私に断言している彼女なのか(中略)、私が言いたいのは通りで、彼女にとっては価値ある経験の唯一の場である通りで、偉大なるキマイラに投げかけられた全ての人間の質問の届く所にいることしか好まなかった常に靈感を与えられかつ与えていた女性なのかということなのだが、それとも(何故それを認めないのか)、時として、身を持ち崩している(下線原文)彼女なのか、何故なら結局のところ他の人たちは彼女に話しかけることを許されていると信じていたわけだし、彼女の中には全ての女性の中で最も貧しい女性そして全ての女性の中で最も身持ちの悪い女性しか見ることができなかったからだ。」(PI p.716)

ここにおいて問題になってくるのは、身体なき器官であるカメラの目をどこにどのように設定するかわからないということなのである。ブルトン自身によって示されたナジャの姿のうちどれが正しくてどれが間違っているかということではなく、ブルトンの問いかけに答え得る視点を持つ者が誰かということなのである。当然それはブルトン自身ではないし、ナジャというわけにもいかない。敢えて言えば大文字で書かれるべき他者ということになるだろうが、具体的にはいかなる主体にも帰属されることがないのだ。そしてその目を通して本当のナジャの姿を見ることになるのは、その目の設定をしたブルトン自身ということになるのである。

第三部 記憶から主観性の確立に

第五章 記憶によって語られるものと語られないもの

身体なき器官である目によって見られる世界というのは、単なる個人の視点によって捉えられたものではなく、誰の視点とは言わないまでも、一種超越的な視点であるように思われる。例えばそれは小説において登場人物が知り得ない事柄、その場にはいない人々の動向であるとか登場人物の将来起こることについて語り手や作者が知っていて、物語の中で介入してくるのに似ている。それは我々が知ることもないし見ることもない世界を把握しているのだ。従って小説において語り手や作者は神様の立場を保有することができるわけであるが、ここにおいて問題となっている身体なき器官の見る世界とは、特定の主体にその視点を帰することのできるものではなく、実際のところ主観的に作り上げられたものにすぎない。つまり我々は実際に神の視点を持つことはできないわけであるし、ある特定の主体に帰せられるべき視点でもないとする、最早それは主観的な想像でしかないのである。確かにそこにはもっともらしさが働くの

であって、恐らくこういう位置から見れば世界はこのように見えるだろうという我々の推測に
応えるものである。このように身体なき器官である目によって見られた世界がある種の作り物
であるとするなら、ある特定の主体に帰せられた目によって捉えられた世界というのは真実な
のであろうか。プルーストの『失われた時を求めて』の中に出てくるマルタンヴィルの鐘楼の
ように、主人公にはたまたまそのように見えたとか言い様がない場合もあるだろう。確かに
我々は物事の把握においてできるだけ誠実であろうとしても、真相を知っている真実を語るこ
とが出来ると言い切ることは不可能だろう。少なくとも自分にはこのように見えたと言うしか
ない。もちろんこれは自分では真実を話しているという意識を伴っている場合のことである。
決して嘘をついているわけではなく、見たままを話しているということなのである。実際問題
としてそこまで厳密さは問わないということも一方で事実であって、厳密に真実でなければ正
しいとは言えないと規定してしまうなら、何事も証言することはできないだろう。ところで論
点を少し変えて、例えば昨日雨が降ったというのが事実だとして、「昨日雨が降っていた」とす
る記述は正しい、真実を反映していると言えるであろうか。決して間違っているわけでも嘘を
ついているというわけでもないのだが、全てを反映しているわけではないと指摘しておくべき
だろう。つまり昨日という日を問題にした場合、ただ単に雨が降ったというだけではなく、他
にも様々な現象が起こっていたはずで、その中の一つを捉えて雨が降っていたと言っているに
すぎないのである。また雨ということだけに注目するにしても、どのような雨がどれくらい降
ったのかということについても明確ではない。今現在雨が降っているのを見ている段階と比較
すれば、その情報量において格段の差があることは認めなければならない。つまり何かを描写
する、記述するということは、決して嘘をついているということではなくても、ある限定的な
事柄しか伝えていないということなのである。そのため自分の目から見てどのように見えるか
だけではなく、どのような情報を伝えるべきかについてその表現の時点で取捨選択が行なわれ
ていると見るべきなのである。更に言うなら、単なる出来事ではなく、そこに何らかの関係が
認められるような一定の流れとして成立する出来事を語る時、それを物語の枠の中に入れて話
すことがあり、それはその方が理解しやすいということから求められてもいることだろうが、
どのような物語を採用するかによって話の内容自体も変化してくると言えるだろう。つまり今
ここにいる自分から世界を眺めて理解し判断していこうとするフーコーの人間主義が認められ
るということである。ここで問題になってくるのは、人それぞれ考え方や感じ方があるとい
うことではなく、何かを表現し記述するということは既にある現実の一部を切り取り、それに合
致しないものは切り捨てるということなのである。以上の議論を踏まえた上で、我々はまず『ナ
ジャ』の中心部分を占めるナジャの物語の中でも、10月4日から12日までの日記形式で語ら
れる部分に注目することになる。例えば10月4日のナジャと初めて出会う箇所において、「突
然、反対の方向からやって来て、恐らく依然として私から十歩くらいのところにいる時、私は
非常に貧しい服装をした若い女性を見る」(PI p.683)というように歴史的現在が使われ、あた
かもその現場に立ち会っているかのような臨場感を持たせる効果を作り出している。またナ
ジャとの会話においても、例えば「私に更に聞くこともなく、間違っって寄せられたかもしれない
(それともそうじゃないのか)信頼をもって彼女が私にする告白の始まりが持ち出すのもまた謎

である。リールでは、そこは彼女の生まれた街で、今からたった二三年前に出て来たにすぎないのだが」(PI p.685)と書かれていて、自由間接話法が使われている。まさにブルトンの視点でもって全ては語られるという具合である。従ってナジャとの出会いの物語は小説的に構成され練り上げられたといったものではなく、まさにドキュメンタリータッチで描写されているのである。当初『ナジャ』についてはナジャの物語の最後においてナジャの不在に言及されるため、これは実際の話ではなく虚構ではないかという指摘もされ、そのような読み方も可能であったようにも思われるが、マルグリット・ボネの研究により、ナジャは実在の女性であることが明らかとなっている。だからというわけでもないのだが、ナジャの物語として書かれていることは本当にあったことなのだと考えていい。ただ問題は既に指摘したように、別に嘘を書いたというわけではなく、そこに書かれているものが偽りのない事実だとしても、全てを反映しているというわけでもないのだ。それは何も書いた本人の問題ではなく、表現媒体の限界を物語るものだろう。そしてこの問題は厳密に言うなら、表現の問題に留まらず我々の認識の問題とも言えるのである。我々は何かの物を前にして、あるいは目の前で展開されている現象について、全てを認識できているかというところではないのである。何もわからないというのではないが、我々として可能なことはとりあえず認識できる範囲内という括弧付きのものである。認識の段階において既にこのような事態であるから、表現について言えば尚更である。そしてまた我々も体験することであるが、何かを書いていて、その後そう言えばこういうこともあったとか、これについては今ならこう言えるといった修正を施したくなることもあるのである。当初の段階で嘘をついていたとか間違っていたというわけではない。あくまで真実であり事実であるという認識の下に書かれたものなのである。このことは仮に修正を経た段階についても言えるのであって、更に修正する余地は十分にあるのである。ところがブルトンについて言うならば、ナジャの物語は書かれたそのものについて、まさに事実として何ら修正も解釈も受け入れる余地がない。10月4日から12日の日記形式で書かれた箇所後、実際ブルトンはナジャとも会っていたようであるが、その点についての詳細な記述はないし、ナジャとの関係について反省的な記述が展開される中で、既に書かれた10月4日から12日までの部分についての説明や解釈といったものは一切ないのだ。例えばあの時の心境としては実はこうだったとか、テキストとして書かれた記述以外に実はこういうことがあったというようなことは書かれていないのである。つまり10月4日から12日までの記述はブルトンにとって神聖不可侵とも言うべき扱いなのである。仮にナジャとの出会いを再び口にしなければならなかった場合、テキストの記述をそのまま繰り返す以外にないだろう。その意味で10月4日から12日までの記述は完璧なのである。この点についてブルトンは自覚的であって、『ナジャ』の序言においては次のように書かれている。「物語のために採用された語調は医学的な、とりわけ神経精神医学的な観察のそれにまねて作られていて、それを報告する時には文体に関して気取りに少しも心をくたくことなく、検査や質問が明らかにし得るものの痕跡を保存することを目指すのである。途中で気付かれるだろうが、〈現場で採取された〉記録を全く変造しないようにするこの決意は、ナジャという人格と同様にここにおいて私自身とともに第三者にも適用される。」(PI pp.645-646)

従って厳密に言うならば、書かれたものが現実そのものを全て反映しているのではないとし

でも、書かれたものはそれ自体として完成し揺るぎないものとなるのである。この意味で書かれたものは実際事実をそのまま書き取ったということであるから、偽りのものではないのだが、全くの別物として捉えることができるわけである。そしてこの場合その記述の主がまさに主体として主観的であり得るのである。この点についてはブルーストが参考になるだろう。ブルーストと言うと、マドレーヌ菓子と紅茶によってもたらされるいわゆる無意志的記憶が有名であるが、それが書かれている『スワン家の方へ』ではなく、最終巻である『見出された時』においてその解決の糸口を見出すことができるだろう。ブルーストの言う幸福感と、ブルトンが少なくとも『ナジャ』においてナジャの物語でもって表現しようとしたものとはあまり共通しているようには思われぬ。確かにブルトンが最後に「そこでは素晴らしくまた裏切ることのない手がまだそう前ではない頃に<黎明>というこれらの言葉を書いている空色の広大な標識板を私に指し示したのだ。」(PI p.749)と書く時、幸福感は明らかに存在していたと言えるだろうが、ナジャの物語にはそのようなものは見当たらない。とりあえずブルーストの幸福感について見ておくと、このような記述がある。「私の人生の様々な時期に私がバルベックの周囲を車でドライブしていた時に見て取ったと思っていた木々の眺め、マルタンヴィルの鐘樓の眺め、ハーブティーの中に浸されたマドレーヌの風味、私が話題にしたシヴァントウイユの最後の作品が私には総合しているように思われた多くの他の感覚が私に与えてくれていた同じ至福。私がマドレーヌを味わった瞬間におけるように、将来についての全ての不安、全ての知的懐疑は消えていたのだ。」(TR p.222)

この論考においては幸福感を問題にしているわけではないし、それをいかに記述するかという問題があるわけでもない。指摘しておきたいのは、ブルーストが幸福感を記述する際に感じたことであって、ただ単に体験したこと感じたことを書き記したということではないのである。我々が主張したい点に繋がると思われるブルーストの記述があるので、それを示すことにしよう。「そして私はこれらの色だけを楽しんでいたのではなくて、それらを提起し、恐らくはそれらに対する渴望であって、疲労と悲しみの何らかの感覚がバルベックで私がそれを楽しむことを恐らく妨げていて、そして今では、外的な知覚において不完全なものを取り除かれて、純粋で現実から遊離し、私を歓喜でいっぱいにしていた私の人生のつかの間を楽しんでいたのである。」(TR p.225)

ここにおいて問題とすべきは「外的な知覚において不完全なもの」という箇所であって、既に指摘したように、我々は外部にある対象を前にして全てを把握するわけではないし、表現に至っても同様である。別にそこに嘘があるというわけではないのだが、全てを把握したという充足感は得られていない。ブルトンがナジャの物語を終えた後、見直す意味でパリの街を見て回る箇所があるが、当時のことを思い出すというわけでもなく、むしろよそよそしい感じがしたりするのである。これについてはブルーストも同様であって、「スワンが愛されていた日々のことをかつて話すことができたのは相対的にいかなる無関心さであったかをあまりにも強く思い出し、というのもこの小楽節では彼はその日々とは別のものを見ていたわけだし、私もかつてそう感じていたように、これらの日々を彼に返したとしてもヴァントウイユのちょっとした小楽節が彼に引き起こしていた突然の苦しみがあるわけで、不均等な板石の感覚、ナプキンの

固さ、マドレーヌの風味が私に思い起こさせていたものは、一様な記憶の助けを借りて、ヴェニスや、パルベックや、コンプレーのことを思い出そうとしばしば努めていたものとは何の関係もなかったというのを私はわかりすぎるくらいわかっていたのだ。」(TR pp.225-226)

つまり我々の認識からすればほとんど同じか全く同じだと思っけていても、必ずしも同じ感覚は得られないのであって、プルーストはこの点について同じ空気かどうかという表現で説明している。つまり「その思い出は我々に突然新しい空気を呼吸させる、それはまさにかつて呼吸された空気であり、詩人たちが楽園においてみなぎらせようと無駄な努力をしたより純粋なこの空気であり、既に呼吸された場合でしかこの入れ替わったという深い感覚を与えることができないだろう。」(TR p.227)

要するに我々が認識し得るものとは別の何かであり、ラカンならここにおいて対象 a という概念を持ち出してきたであろうが、これは要するにドゥルーズ=ガタリの言う「此性」Heccitéである。ドゥルーズ=ガタリは『ミル・プラトー』において次のように書いている。「ある日の、ある季節の、あるいはある出来事の個性とは何か。より短い一日とかより長い一日というのは適切に言えば拡張ではなくて、暑さや色などに固有の度合があるように、拡張に固有の度合なのだ。偶然の形態というのは従って構成している同じ量の個体化によって作られた、〈風土〉を持っているのだ。度合や強度というのは別の個体を形作るために別の度合や、別の強度でもって作られる個性、つまり〈此性〉なのである。(中略) 要するに、実質的な形態と特定の主体との間には、つまり二者の間には (下線原文)、悪魔的な局所的忘我の行使があるだけではなく、受け取る側のしっかりと形成された主体の個体化とは全く違った個体化を構成する、此性の、度合の、強度の、出来事の、事件の自然界の戯れがあるのだ。」(MP p.310)

プルーストの例で言うなら、マドレーヌ菓子を紅茶に浸して食べるということは、記憶にある体験以降数限りなく存在したはずである。恐らくマドレーヌ菓子や紅茶そのものについても製品としての次元で言うなら同じものであったであろうし、体験する側もプルースト自身ということで同一人物なのである。もちろん主体の側について言えば、年齢による変化というものもあるわけだし、様々な体験や思索の結果影響を受けているということも言える。また体験する場の変化というものもある。従って厳密に言うならば全く同じものは一つとして存在しないのであるが、それにも拘らずプルーストは子どもの頃の体験を思い出したのである。それも単なる事実としてではなく、ある種の幸福感を伴っていたわけで、プルースト自身から漏れてきた言葉にならない言葉を想像するなら、まさに「これだ!」に他ならない。つまりこれこそがドゥルーズ=ガタリの言う此性であって、それは紅茶に浸したマドレーヌ菓子において認められるとはしながらも、それを認め得るのは主体の側であり、更に言うならそのような条件が揃っていたとしても必ずしも存在するとは限らないものなのである。その意味で『ナジャ』におけるナジャの物語はブルトンにとって此性を持つもの、つまりブルトンをして「これだ!」と言わしめるものである。それは何についてのことなのか。ブルトンは『ナジャ』のテキストにおいてナジャの物語を始める前にいわゆるシュルレアリスム的と形容し得る体験の数々を挿話として書き記している。それは運命の奇妙な暗合を示すものであったり、不可思議を体験した記録としても捉えられるものである。それぞれはブルトンにとって何かしら訴えてくるものがあつた

のである。しかしそれらではなく、まさにブルトンにとってナジャの物語がこれだという此性を持っていたのである。このことは『ナジャ』を予告するとされている 1922 年 3 月に刊行された『文学』新シリーズ第一号に発表され、後に『失われた足跡』に収録されている「新精神」の存在からも裏付けられるであろう。街中で謎の女性と出会うが、正体がわからないまま終わってしまうという実体験であり、この種の話にはブルトンの主観性を刺激する何かがあるのである。従って、実体験としては存在しながらもブルトンにとって重要であるのは、それが事実であるということの他に、いくつかの項目があったに違いない。そのため体験したことを可能な限り全て表現し尽くさなければならないわけではなく、必要とされているものだけを書けば後はもうどうでもよかったのである。体験したものの全てを書き切れなかった、書き残したものがあるとするのは承知の上だったのである。10 月 12 日以降もブルトンはナジャに会っていたにも拘らず、その部分がほとんど省略されているということについてもこれで説明がつくだろう。そうであるならば、ブルトンにとって此性を持つ 10 月 4 日から 12 日までの記述において何がブルトンにとって必要であり十分と思わしめたのであろうか。ここにおいてブルトンの主観性が問題となってくるのである。

第六章 記憶は主観性を求める

ドゥルーズ=ガタリの『ミル・プラトー』の中には、器官なき身体について次のような記述がある。「器官なき身体とは全てを取り除いた時に残っているものである。そして取り除くものはまさに幻想であり、意味形成性と主体形成性の全体である。精神分析はその逆をする。つまり全てを幻想に翻訳し、全てを幻想に現金化し、幻想を管理し、そして特に現実を逃す、何故なら器官なき身体を逃すからである。」(MP p.188)

このように考えるならば、現実において生活を送る我々はこの幻想にとらわれていると言っているに違いないだろう。例えば夏は暑いとか冬は寒いとかいったことは日常的にごく当たり前のこととして感じて、その意味を考えることはないだろう。むしろ暑くない夏や寒くない冬が来れば、その異常気象の要因について考えなければならなくなるくらいである。ところがブルーストがマドレーヌ菓子を紅茶に浸して食べた時の幸福感は、ごく当たり前のことであっただろうか。むしろ何故このような幸福感が生じたのかについて考えることになるのである。「私はいかなる新しい推論をしたわけでも、決定的な論証を見つけたわけでもなく、今しがた解決不可能だった難しさが全ての重要性を失ってしまっていたのだ。しかし、今回、私がハーブティーに浸したマドレーヌを味わっていた日にしたように、理由を知らずに諦めることはすまいと固く決心したのである。私が体験したばかりの至福は、私がマドレーヌを食べながら体験し、その時は深い理由を探し求めるのを引き延ばしていたものとまさに実際のところ同じものだったのである。(中略)しかし、ゲルマント家のお茶会を忘れていたために、私がこうして私の足を置きながら感じていたものを再び見出すことに成功していたとしても、再びまばゆくそしてぼんやりした幻影が私に軽く触れこう言っているかのようなようだった。<もしお前に力があるのなら、通りがけに私をつかまえてごらん、そして私がお前に差し出している幸福の謎を解こうと努めてごらん>。」(TR pp.222-223)

恐らくただ感じるだけではすぐに見失ってしまい、再び見出すことも困難であるかもしれな

いということから、知性の力を総動員してその感覚を確保し、できることなら確固たるものとして引き止めておきたいということなのだ。またドゥルーズ=ガタリは同じく『ミル・プラトー』において、中編小説について次のように説明している。「文学ジャンルとしての〈中編小説〉の本質は、規定するのがそれ程難しくはない。つまり〈何が起きたのか。まさに何が起こり得たのか〉という問いの周囲に全てが編成されている時、中編小説は存在するのである。(中略) 推理小説はその点とりわけ折衷的なジャンルで、というのも、ほとんどの場合、何か=x は殺人や強盗といった種類で起こっているが、起きたことはいずれ暴き出されるであろうし、それも手本である探偵によって限定された現在においてなのである。」(MP pp.235-236)

『ナジャ』を推理小説として捉えることには相当の困難が伴うであろうが、それでも『ナジャ』の中には様々の謎が仕掛けられているということも一方で事実なのである。そもそも『ナジャ』の本体は「私とは誰か。」(PI p.647) という問いかけで始まるわけであるし、同種の問いかけはナジャと知り合った 10 月 4 日にナジャに向けて「あなたは誰か。」(PI p.688)、10 月 12 日以降の部分で「現実の前で我々は誰だったのか」(PI p.714)、「本当のナジャとは誰か」(PI p.716) という形で発せられる。ブルトンにしてみれば「人生は暗号文のように解読されることを求めるのかもしれない。」(PI p.716) というわけであるから、テキストの中に答えを見出すことが出来ないとしても、求められるべきものではあるわけだ。それに『ナジャ』を推理小説とみなすことには無理があるとしても、謎の女性がテキスト上においては最後に姿を消してしまうわけであるから、少なくともその消息を知るとかいった謎解きの設定はなされていると言えるだろう。通常の推理小説においてはどのようなわけか全てを知り尽くした探偵がその全貌を解説するわけであるが、『ナジャ』においては謎は謎のままであり続ける。我々はこの謎に対してそれなりの解答を与えることはできるだろうが、決定的なものとはなり得ない。ブルトン自身にしたところで、十分な解答を与えることができるか疑問であるが、少なくともテキスト上において設定された謎に対して意味を与えることができるのはブルトン以外には存在せず、それはテキストに対して主体的であるのはブルトンに他ならないからである。ブルーストは『見出された時』において「物がその本質を保存している過去と、それらが再びそれを味わうように我々を促している未来」(TR p.245)、「この本質は部分的には主観的であり伝達不可能である。」(TR p.245)と書いている。我々が設定された謎に対してもっともらしい解答を用意したところで、その正当性を論理性や自らの体験に照らし合わせて主張することはできないだろう。テキストに示された内容に共感するにしても、その時点で作者の意図するところと我々の解釈とが一致したということにはならない。我々は誤解しているかもしれないわけであり、そしてまたそれを誤解であると作者は主張することもできないだろう。謎に対して解答を与え得る者こそ主体であり、その際の意識のあり方が主観性であると言えるだろう。表面上は謎という形を取っていなくても、そこに何らかの意味、例えば幸福感といったようなものを見出す時、そこには主観性があるということなのである。記憶に対して主観性が存在することについては、『ナジャ』の次のようなテキストの構成からも明らかとなるだろう。10 月 4 日から 12 日までの期間中、ブルトンはナジャのことを愛しているかどうか自問しながらも、例えば 10 月 7 日の記述においては「しかしながら、午前中ずっと、私はナジャが恋しくてたまらなかったし、今日彼

女と会う約束をしていなかったことで自分をとがめた。」(PI p.701)と書くくらいではあるのだ。ところが10月12日以降テキスト上においては点線が施され、行間も空けられた上で、日記形式とは違ったいささか反省的なブルトンの記述が展開されることになる。ナジャの物語が終わるまで、このように点線が施されるなり行間が空くなりしてそれぞれ別個のものであると我々にも認識できるように配置されているテキスト群は5つある。まずその一つめの冒頭において、「ここにおいて死に物狂いのこの追求が終わるということがあり得るのか。何の追求か私は知らないが、精神的魅惑の全ての技巧をこのように用いるための、追求 (下線原文) なのだ。」(PI p.714)

「死に物狂いの追求」とは言いながらも、いささか冷めた自己分析であるようにも思われる。「何の追求か私は知らない」というのも他人事のように思われる。ナジャを特別な存在とみなしながらも、「彼女の過去の人生のいくつかの場面について彼女が私にしてくれたあまりにも詳細な物語に対してひどく荒々しく抵抗することが私にはあった。」(PI p.716, p.718)

そしてこれは日付も明確に示されていて、何と10月12日の翌日にあたるのであるが、「その話は(中略)10月13日の午後の初め、彼女が私に訳もなく語った時には、危うく永久に彼女から離れるところだった。」(PI p.718)

そしてこの一つめのテキストの最後において、結局のところ次のように締め括られるのである。「別れが結局のところ不可能かどうかは、私次第でしかなかったのである。」(PI p.718)

10月13日のことについても、これが書かれた時点においては過去のことであって、このような気持ちの変化が10月13日に始まったらしいということが推測されるのである。とは言いながらも、この時点でブルトンはナジャと完全に別れたわけではないということがわかる。ところが二番目のテキストの冒頭は依然としてナジャを特別な存在とみなしながらも、一番目のテキストとは少し違った調子で語られることとなる。つまり「私は何度もナジャと会ったし、私にとって彼女の考えは更にわかりやすくなったし、そして彼女の表現は軽やかさと、独創性と、深みを増した。同時に取り返しのつかない破綻が彼女自身のそして最も人間的に限定されたある部分を引きずり込んでいるために、私があの日心に浮かんだ破綻が少しずつ私を彼女から引き離したということはあるかもしれない。」(PI p.718)

ここで書かれている「あの日」とは10月13日のことなのだろうか。しかしこの日のことについては既に一番目のテキストにおいて明らかになっていて、他の要因はなかったはずであるし、そのことは二番目のテキストにおいて明記されていない。変わったのはブルトンの方なのだ。この二番目のテキストの最後において、ナジャの言葉が書き連ねられるのであるが、その直前においてブルトンは次のように書いている。「私は日々が経つにつれて、私の前で口にされたり私の目の前で彼女によって一気に書かれないいくつかの言葉、そこでは彼女の声の調子が最もよく感じられその響きは私の中で非常に大きなままでいる言葉しか最早思い出したくはないのだ。」(PI p.719)

ナジャの素晴らしさを称えているようにも思われるが、この時点においてナジャはブルトンにとって完全に過去の存在である。ところがナジャの方はというと、マルグリット・ボネの研究によると(PI p.1510)、ブルトンと会わなくなって以降10月22日から翌年の2月半ばの間に

27 通の手紙や速達郵便を出している。特に 1 月 30 日の手紙では「もしあなたが私を捨てるなら、私は破滅したような気になります。」(PI p.1512)と書いている。従ってここにおいてはブルトンの強い意識があると思われる。次に三番目のテキストにおいては、ブルトンがナジャと会わなくなってからデッサンを描き始めていて、それについて言及したものである。ここにおいてはブルトンがナジャに対してどのような距離を取っているのか明確にはわからない。ところが四番目のテキストに移るに当たっては、また点線が施され行間も空けられている。そしてその四番目のテキストの冒頭が次のようなものである。「私は、結構ずっと前から、ナジャと理解し合うことがなくなっていた。実を言えば、恐らく我々は一度も理解し合ったことがなかったのだ、少なくとも生活に関わる単純な物事を考える方法については。」(PI p.735)

ここに至ってそれまで過去の表現については複合過去が用いられていたにも拘らず、大過去が使用されている。内容的にも言えることであるが、大過去の使用がブルトンの意識の中でナジャを更に過去に押しやっているように思われる。しかしブルトンにすれば、それは愛がなくなったからでもともと愛していなかったというのでもないのだ。「私がいかなる欲望を持っていたとしても、恐らくはいかなる幻想をも持っていたとしても、恐らく私は彼女が私に提示していたものと同じレベルにいることなどなかったのだ。しかし彼女は私に何を提示していたのか。どうでもいいことだ。」(PI p.736)

ここにおいて問題は愛の有無ではなく、能力の有無になってきている。いずれにせよ、ブルトンの気持ちは変わってしまったのだ。そして最後の五番目のテキストであって、これは既に狂気の問題で指摘したところである。ここで指摘しておかなければならないのは、ナジャの入院が人によって教えられた伝聞にすぎないということである。ナジャとの距離はナジャの問題を自分自身で体験して知るというのではなく、そこに人が介在するまで遠く隔たってしまったのだ。以上のことから明らかなように、10 月 4 日から 12 日までの日記形式で書かれた後のテキストは、それぞれが前のテキストとの間に点線や行間があって、それがそのままブルトンとナジャとの間の距離を物語っているわけであるが、後のテキストになる程その距離は広がり、修復不可能と言える程にまでなっている。ここで指摘しておかなければならないのは、時間性とでも言うべき問題である。これは何も時が経つごとにかつて体験したことが過去のものとなっていくということではない。そうではなくて、そこに起こる変化というのは、ブルトンの主観性の推移ということなのだ。つまり 10 月 4 日から 12 日の間は愛し合っていたが、その後ナジャの本当の姿を知ることになり失望し愛が冷めてしまったという時間の経過とともに進行する物語というのではない。当初はシュルレアリスム精神の具現化といった形でナジャを捉えていたにも拘らず、実はナジャのことは理解していなかったし、それは向こうだって同じことだということである。つまり揺るぎない事実が時間の経過とともに蓄積され現実に至っているというのではなく、一方で事実は事実として存在しつつも、それをいかに捉えていくかということで、もう一方で主観性が存在するわけである。もちろんこれは主観性によって事実が歪曲され捏造されることもあるということの意味しない。またここには歴史的な脈というものも存在しない。つまりブルトンはナジャと知り合い愛し合ったが、結局のところ別れに至ったということにはなるのだが、それは別れるべくして別れたのだという、別れという終結に向かっていく

話の流れというものには存在しないということである。仮にブルトンがそのような視点で『ナジャ』を書こうとした場合、10月4日から12日までの記述は明らかに書き換えられることになったに違いない。ここにおいて明らかに認識しておかなければならないのは、ブルトンにとってナジャが揺るぎないものとしてあり、それをブルトンがいかに捉えていくかということではないということである。ブルトンはナジャと知り合うことによって新たなブルトンへと変化し、その変化したブルトンが恐らくは同様に変化しているナジャを捉えていくというわけである。日々の体験を通して記憶はその都度書き換えられるわけであるが、日々の体験によって量的に増えていくからだけではなく、敢えて言うならばもう一人のブルトンがいて、理想の女性に出会うことを求めて常に開かれているブルトンがいるからである。ブルトンが『ナジャ』について「恐らく私がこの本を<扉のように自由に出入りできる>ようにしておきたかった」(PI p.751)というのも、その意味においてなのである。もしナジャがブルトンにとって理想の女性であるならば、この『ナジャ』は最終版として捉えられることになるだろう。ところがブルトンにとってこの時点において「君」が理想の女性として捉えられているのである。従ってブルトンは次のように書くのだ。「故意にそうするのではなく、君は私にとって最も親しいものとなった外見、並びに私の予感していた顔に入れ替わった。ナジャは後者の方に属していたし、君が私から彼女をさげすんでしまったのは見事だ。」(PI pp.751-752)

ここにおいて一つの疑問が出てくるだろう。仮に「君」が理想の女性であるとするなら、何故ナジャではなくこの「君」について書かれることがなかったのかということである。これに対しては次のように答えることが出来るだろう。ブルトンが書きたかったものはナジャそのものではないのだ。ナジャは最早理想の女性ではないとした上で、その時点において不在であったし、恐らくある意味では常に不在であり続けるであろう理想の女性を追い求める欲望を持ったブルトン自身こそ書かれるべきであったということなのである。理想の女性は『ナジャ』のテキストにおいては、特にナジャの物語の中では観念的なものではあるが、最後に「君」という女性として出現するという意味では完全に実在的なものとして存在する。このように実在するといっても、それが我々にとって不可視なものであることには変わりがない。とはいえ、この理想の女性の存在は『ナジャ』のテキストの中に投射される。ブルトンの求めているものがナジャであるかのように思われながらも、実はナジャを通過して更にその先にあるものであることが我々にも認識されるからだ。事実『ナジャ』のテキストにおいて書かれているものは主としてナジャについてでありながら、理想の女性を見出そうとするブルトンの意図が見え隠れするのである。そもそも不在であるものについて記憶を形成することはできないし、どうしても観念的なものにならざるを得ない。ブルトンの言う「私の予感」にしたところで、同様のものではあつただろう。フーコーは『言葉と物』において次のように書いている。「しかしそこでは、表象が受け取ると同時に誇示するこの消滅において、本質的な空虚は是も非もなくあらゆる場所から示される。つまりその基礎となるものの——それが似ているものそしてその者の目には類似でしかないものの必然的な消滅である。この主体そのもの——それは同じものである——は省略されたのである。」(MC p.31)

理想の女性が不在であるならば、その類似物であるナジャによってテキストを書き続けるし

かない。ナジャについては明らかに記憶が存在するのである。記憶を基礎付ける事実は事実として存在しながらも、それをどのように言葉として捉えていくかについてはもう一方で明らかな視点を持った存在が必要となってくる。ここにおいては理想の女性を見出すという意図を持ったブルトンという存在であり、単なる現実存在というに留まらず、主観性を持った存在であることが求められるのである。

終章

シュルレアリスムのテキストにおいては、例えば『溶ける魚』のように意味を持たない記号、つまりシニフィアンによってのみ書かれたものがある。言葉には当然の如くシニフィアンとシニフィエがありということにはなるが、シュルレアリスムの自動記述のテキストにおいて意味を探ろうとしてはならない。確かに無意識状態で書かれたテキストとは言いながらも、その自動記述度においては様々な程度の差があるわけだし、実際には書かれたテキストに後で手が加えられるということもある。それに無意識状態では言いながらも、不覚にも意識が介在したということもあり得る話である。また書かれたものが全て無意識的であるとしても、読者である我々が意識的にそこに意味を見出そうとして何らかの成果が挙げられることもないとは言えないだろう。もちろんこのような読み方は邪道であるとすることも可能であって、というのも原則的にシュルレアリスムのテキストに求めるべきは意味ではなく、イメージにすぎないのである。例えば『溶ける魚』について言うならば、光溢れる色彩豊かな世界=楽園のイメージである。ところがシュルレアリスムとは言いながらも自動記述のテキストでなければ、そこには当然の如く意味が伴ってくるわけである。ところがブルストの『見出された時』に言及するところで既に指摘したように、我々に何かを伝えようとする芸術作品において「部分的には主観的であり伝達不可能である」(TR p.245)ということなのである。それに主観的であることの反対として捉えられている客観的ということにおいても、要するに間主観性や共同主観性ということに行き着くのであって、もとを辿れば主観性というわけである。確かに現実生活において我々の認識が不確かな時、他の人たちも同じような認識をしていれば見間違いとか勘違いということではなさそうだということも言えるわけであるから、それなりに有効な考えではあるのだ。しかし逆に言うなら、他の人たちとの認識の共通性が見出されなければ意味がないということになれば、シュルレアリスムとしても問題が残るだろう。ブルトンが「序言」において書いているように、主観性の問題は意味を求めるテキストにおいてもまず第一に考えられなければならないものであるのだ。つまりブルトンは次のように書いているのだ。「主観性と客観性は、生涯を通して、一連の攻撃を交わすことになるが、そのうちほとんどの場合結構早く前者が非常に体調が悪く攻撃を終えることになる。35年後(古色がかかなりだ)私が後者に惜しままいと決めているちょっとした配慮は客観性のみが尊重するよりよく言うというある考慮の表われでしかない、もう一方の最大のよいところは——私にとって一層重要であり続けるのであるが——間違いだらけの恋文や<正しく書かれていない恋愛本>の中にある。」(PI p.646)

この点については1928年に『ナジャ』の初版が刊行された後、1962年に全面的な改訂を施して、1963年に新版を発表していることを指す。全体的な内容について大きく変わることはな

く、「序言」において明らかにされているように、文章の表現上用語を適正なものにしたり滑らかなものにしたりする、更には客観性という点からいくつかの修正が加えられたというわけである。注も8箇所追加され、写真についても付け加えられたり別のものと入れ換えられたりしている。これらの点については別の研究があるので、それを参照することとして、問題は主観性の方である。ブルトンが例として挙げているのは、「間違いだらけの恋文や<正しく書かれていない恋愛本>」ということになるのであるが、『ナジャ』がそれに当たるということではない。ブルトンは10月4日から12日においてナジャと直接会い、その時の様子を忠実に再現しているわけであるが、むしろブルトンがナジャと会わなくなり距離を置くようになって、結局のところナジャとは一体誰だったのかという問いを発するに至った方が真実に近いということではないかと思われる。つまりブルトンがナジャとの出会いを通して発見したものは、少し風変わりではあるがごく普通の女性にすぎないという事実であって、ブルトンとしては何としてもその事実を隠さなければならなくなった。そのためナジャを遠ざけ、ブルトンにとっては理解できない存在であるとすることによって、シュルレアリスム精神を体現した存在であるという立場を維持するのである。結局のところナジャはただの一人の女性にすぎなかったという事実を封印する策略として最終的にはナジャを不在の存在としてしまうのである。シュルレアリスム精神の具現化された存在というものがもともとなかったとすれば、それを敢えて不在のものとしてしまうことによって、ナジャを特別な存在とするのである。これはカフカの『審判』の中にある「旋の門」の寓話と同様のものとして理解されるだろう。つまり男にとって門の存在は男のためだけに存在していたということ、男だけがその門の存在を知り、その門に魅惑されていたことを知るという寓話である。理想の女性を求めるブルトンにとってナジャがただの女性ではなく、シュルレアリスム精神の具現化のように見えるというのはブルトンにとってだけであったこと、ブルトンは初めからそのような設定に組み込まれていたということである。これは既に指摘した『失われた足跡』の中の「新精神」で描かれている謎の女性が前提として存在していると言っていいだろう。つまりこれは街中で見かけた、それもブルトンだけではなく他の友人たちによっても目撃された女性であったのだが、その後すぐに街中を探し回ったにも拘らず、結局のところ見出すことのできなかった女性であって、それと同一人物であるとするわけではないが、今度こそ逃すことはないとブルトン自身決めてかかっていたために、自ら設定したこの仕組みに入り込んでしまったと考えられるわけである。そして結局のところナジャはブルトンにとって求めるべき女性ではないという事実もブルトンの中で明らかとなるのであるが、しかし重要であるのは、あるいはシュルレアリスムとして真実であるのは、何とも悲惨な事実ではなくて当初抱いていた幻想の方ではないかということなのである。つまりナジャはナジャであり続けなければならないのであるが、現実の問題としてそれが不可能であるとなれば、ブルトンに残された手段はナジャをテキストとして存在させるという方法である。そもそもナジャとは幻想にすぎなかったのであるし、テキストとは現実そのものを忠実に再現したのではなく、主観的に切り出された現実の一局面にすぎないのであるから、『ナジャ』というテキストが成立した時点で最早現実存在としてのナジャは不要になったと考えられるだろう。それにしても何がブルトンをここまで駆り立てるのか。これについては『ナジャ』においてナジャの

物語の前にシュルレアリスム的な挿話の数々が述べられるが、その前提に次のような考えが示されるところがある。「私は、他の人たちと比べて、私がどう区別されているのかについて何に基づくのかではないとしても、何から成り立っているのか知ろうと努めている。私が他の全ての人たちの中であってこの世界で何をしにやって来たのかそして私自身でしかその運命に応えることができないということで私はどんな唯一の伝言をもたらすことになるのかわかるのは、私がこのどう区別されているのかといったことを自覚する正確な度合によるのではないか。」(PI p.648)

このような意識、志向を持つブルトンにとって現実が起こった（これが肝心だ）出来事で不可思議なものは欠くべからざるものであったのだ。そのようなものを探し求めていたと言ってもいい。一方でこの『ナジャ』においてはもちろんのこと『通底器』や『狂気的愛』においても顕著に見られるように、ブルトンにとって理想の女性というのは常に求められるべきものであったのだ。不可思議=理想の女性というのではないが、それが意味結合したと考えられる「謎の女性」というのは、極めて関心を持たせる主題であったことは疑いない。「新精神」で取り上げられた謎の女性は喪失感ばかりが先に立ってしまう。我々がそのテキストに解釈を加え、様々な可能性について論じるためには、少なくとも現実にあったこととして信じるためには、それなりの長さで物語的な展開も必要であったということなのである。『ナジャ』はその要請に応えるものであり、これからも応え続けるであろう。

注

引用文の後の括弧の中に示されている略記号は、以下の文献を示している。尚、引用文については全て筆者が訳出したものである。

(PI) André BRETON, *Œuvres complètes I*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1988

Les pas perdus, 1924, pp.191-308

Manifeste du surréalisme, 1924, pp.309-346

Poisson soluble, 1924, pp.347-399

Nadja, 1928, pp.643-753

Second manifeste du surréalisme, 1930, pp.775-833

(PS) Ferdinand ALQUIÉ, *Philosophie du surréalisme*, Flammarion, 1977

(DR) Gilles DELEUZE, *Différence et répétition*, puf, 1968

(AO) Gilles DELEUZE, Félix GUATTARI, *L'anti-Œdipe*, Les éditions de minuit, 1972

(MP) Gilles DELEUZE, Félix GUATTARI, *Mille plateaux*, Les éditions de minuit, 1980

(EN) Jean-Paul SARTRE, *L'être et le néant*, Gallimard, 1943

(MC) Michel FOUCAULT, *Les mots et les choses*, Gallimard, 1966

(SP) Michel FOUCAULT, *Surveiller et punir naissance de la prison*, Gallimard, 1975

(TR) Marcel PROUST, *Le temps retrouvé*, folio, Gallimard, 1954

尚、直接引用はしていないが論考中、特に第四章においてその論旨を展開したように、スラヴォイ・ジジェク『身体なき器官』（河出書房新社、2004年）に多くの示唆を受けた。

